

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 318



1998 MAY



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

平成10年度通常会員総会のお知らせ!!

日本ヒマラヤ協会平成10年度通常会員総会を下記により開催いたします。

ご承知のように、総会は本会の最高意思決定機関でありますので、会員の皆様には万障繰り合せのうえ出席くださるようお願いいたします。

なお、やむを得ず欠席される場合は、定款の定めるところにより、委任状を必ず提出されるようお願いいたします。(委任状は、別途送付いたしました料金受取人払はがきをご利用ください。)
5月20日までに必着するようお願いいたします。

記

1. 日時 平成10年5月30日(土)午後1時～2時
2. 場所 東京都豊島区東池袋4-7-7
かんぽヘルスプラザ東京
☎ 03-5952-6881
JR池袋駅東口から徒歩8分
地下鉄有楽町線東池袋から徒歩2分

3. 議事

- (1) 議案第1号 平成9年度事業報告について
- (2) 議案第2号 平成9年度収支決算について
- (3) 議案第3号 平成10年度事業計画について
- (4) 議案第4号 平成10年度収支予算について
- (5) 議案第5号 会員の除名について
- (6) 議案第6号 定款の一部変更について

4. その他

表紙写真

昨年夏、スキルブルム峰に登った。この登山で亡くなった原田、土森、広島、中込さん達が、20年前に挑戦した世界第二位の高峰「K2」の圧倒的な西壁をみながらの登山であった。

古関 正雄

ヒマラヤ No.318

1. ネパール国際山岳博物館建設支援募金のお願い
2. アルナチャール北西部の旅 沖允人
8. Super Himalayanist ジャン・トロワイエと禅 住吉仙也
10. HAJ創立30周年記念講演(2)
「ネパール・ヒマラヤ登山と環境(私見)」 ハルカ・グルン
18. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
21. 1998年中国ヒマラヤ日本隊入山計画
22. 1998年ネパール春季登山隊一覧表
23. 1998年パキスタン登山隊一覧表
24. 寸感・事務局日誌

ネパール国際山岳博物館建設支援募金の

—— お 願 い ——

登山愛好者にとっての憧れの山・ヒマラヤはネパール王国をはじめとする国々に聳え立っております。日本の多くの登山家がエヴェレストに代表されるネパールとその国境上に聳え立つ7000m、8000mのヒマラヤの山々の山頂に足跡を印し、幾多の感動的なドラマを生み、また悲しい思いをして参りました。

それらの登山のたびにネパール王国とネパールの人々には言葉では言い尽くせない程お世話になったことは言うまでもありません。

さて、ネパール山岳協会（NMA）は人類最初の8000m峰登頂となったアンナプルナの山々を眼前に見るポカラの町に「国際山岳博物館」を建設し、「山、登山、環境ならびに民族誌学的な遺産を後世のために保存する」、「ネパール・ヒマラヤに関連する山と登山についての調査・研究・出版物の発行を推進する」等々により、世界の山岳文化を育て、発信しようとの遠大な構想を打ち出しました。

ネパール山岳協会は10数年前に、ポカラ空港近くに48ヘクタールという広大な土地を取得し、その準備を進めて参りましたが、1995年10月に起工式を行い、『ネパール観光年』である本年98年9月27日の「ネパール観光の日」に博物館落成式を行うべく、現在大きな博物館の本館の建設が進められております。

その総費用が約4億円必要とされているため、ネパール山岳協会ではこの建設費の一部について、日本の関係団体にも支援を要請して参りました。私共はヒマラヤ登山やトレッキングで知ったネパールの人々の素朴で温かい心やもてなしに少しでもおこたえしたい、お返ししたいと考えました。

その博物館建設の強力な推進者でありました、ネパール山岳協会ダワ・ノルブ・シェルパ会長は、昨年10月28日に急逝されてしまいましたが、ネパール山岳協会としてはダワ・ノルブ氏の遺志をついで完成させたいと頑張っております。

そこで私共は日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本・ネパール協会の6団体による「国際山岳博物館関係団体連絡協議会」を組織し、募金の進め方などについて話し合いを進めて参りました。

本年1月に建設中の山岳博物館を見、ネパールにある数多くの博物館を視察した日本人の博物館学芸員の評によりますと、内容を充実させれば「ネパールに随一」の博物館になるだろう、と太鼓判をおして下さいました。

募金目標額は総費用の一割の4000万円といたし、登山者、トレッカー他ネパールと関係のある、あるいは関心のある法人、個人をはじめとする多くの皆様に呼びかけて参りたいと思います。5万円以上の寄付をされた方々には日本山岳協会より免税の措置をとる予定です。お申し出下さい。

皆様には趣旨をご理解いただき、ネパールと私共の変わらぬ友好のために協力をお願い申し上げます。

国際山岳博物館関係団体連絡協議会

会長 坂口 三郎

〔(株)日本山岳協会会長〕

(株)日本山岳協会

日本勤労者山岳連盟

(株)日本山岳会

日本ヒマラヤ協会

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト

日本・ネパール協会

※銀行振込

富士銀行渋谷支店

普通 210-3141016

ポカラ国際山岳博物館

協議会

※郵便振替

00140-4-13926

ポカラ国際山岳博物館

連絡協議会

アルナチャール北西部の旅

沖 允人

はじめに

概要

1998年1月初旬にアルナチャール・プラデーシュ州（以下アルナチャールと略記）の北西部のボンディラ（Bomdila）、タワン（Tawang）などブータンと中国国境に近い村々を四輪駆動車で走破した。僅か4泊5日の旅であったが、日本人は初めてという、知られざる地の興味深い旅を楽しんだ。メンバーは沖と古い山友達の梶田明、野村務、菱田勝美の4人であった。

旅の発端と特別許可

タワン地域に外国人が入域できそうだという話を聞いたのは2年前の1995年9月、南アフリカのジンバブエであった。ジンバブエで開催された太陽エネルギー国際会議に、アルナチャールのイタナガル（Itanagar）に住むK.C.ディモレー（Dhimo）さんとガウハーティ（Guwahati）のD.ケディア（Kedia）さんがインド代表として出席していた。学会主催のヴィクトリア・フォールなどへのバスツアーと一緒に参加したとき、このニュースを聞いたのだった。

早速、その年の冬にタワンへの入域をインド政府に申請したが、音沙汰はなかった。このことは、6ヵ月以上前に申請することになっているので予想されていたことではあった。翌年の1996年の冬に今度は6ヵ月以上前に申請し、在日インド大使館にも連絡したが許可はでなかった。

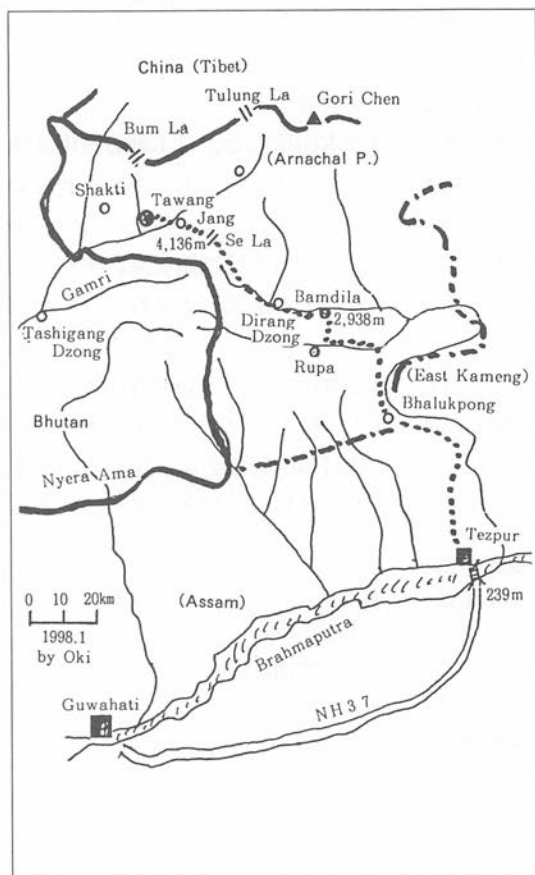
3度目の正直で、1997年末から1998年初冬にかけて2週間の申請をした。9月になっても返事はなかった。9月の中旬に仕事で3日ほどデリーに行くことになり、時間を割いてアルナチャール州政府のデリー事務所（Resident Commissioner, Arnachal Bhawan）を訪ねた。4人以上のグループに限って許可ができることになっているのでう

少し待って欲しいという話であった。しかし、11月になっても、連絡はなかった

一方ではアルナチャールのエネルギー局の責任者であるK.C.ディモレーさんを通し州政府の招待者ということで別途入域許可申請をしていた。12月に入ってやっと中央政府の許可がでた。期間は1月3日からの僅か4泊5日であった。ともかくタワンという地名が許可書に記入されていたのでひと安心した。

テズプールへ

アルナチャールの旅の出発点はガウハーティ空港である。ガウハーティはインドの主要都市と結ばれていて、飛行機や列車でも行くことができる。



ガウハーティから北東に約160kmほど国道37号線を走るとブラフマプトラ河に近付き、シルガジ (Silghj) という村でブラフマプトラ河を渡る。この河にかかる橋はガウハーティの近くとテズプール (Tezpur) の南のこの橋の2つしかない。3つ目の橋が建設中である。橋のないところはフェリーが人や車を運んでいる。シルガジの標高は239mである。

長さ3kmあるシルガジの橋を通行料金5ルピー (約15円) 払って渡り、西に10kmほど行くとテズプールである。テズプールで宿泊したルイト (Luit) というホテルは町一番の三ツ星クラスである。シャワーのお湯は十分にはでなかったがレストランの食事はかなりの味であった。「ルイト」とはブラフマプトラ河の地元の呼び名である。テズプールで、これからの山道と悪路にそなえてそれまでのタクシーから四輪駆動車に替えた。

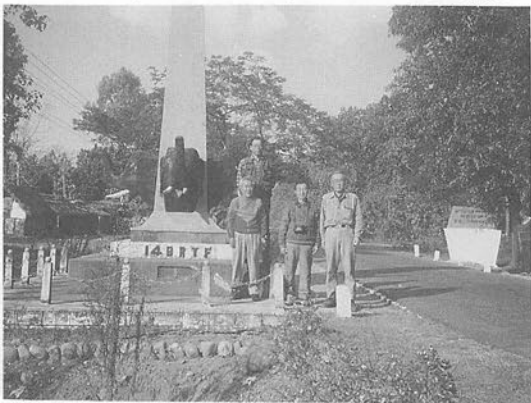
チェックポスト

テズプールから12時間のドライブでインドの北東にあるアルナチャールの中心の町ボンディアラに向かう。国道37号線から離れて北へ向かうが、道は片側一車線の細い道路になる。チャルドゥアル (Charduar) を経由して1時間あまりで、バルクボン (Bhalukpong) に着く。ここまではお茶畑や米や野菜畑の中を走る。

バルクボンのチェックポストでインナーライン通行許可書の厳しいチェックを受ける。インド人も外国人もこの許可書が必要である。アルナチャールの旅はこの町から始まるのである。私たちは、アルナチャールに7つある行政区のもっとも西にある西カメン (West Kameng) 地域に入る訳である。その東は東カメン地域である。

一般外国人に旅行が許可されるのはイタナガル、ズイロ (Ziro)、ダボリジョ (Daprijo)、アロン (Along)、そして空港のあるディブルガル (Diburagar) に限られている。私は1974年1月に日本ヒマラヤ協会の藤井毅、永田宗嘉と一緒にディブルガルからさらに奥のサディアまで旅をしたことがある。記録は『ヒマラヤの桃源郷』(1975年、H A J出版)の一部に発表した。このときも日本人としては初めての入域で、厳しいチェック

▼アルナチャールへの入口のゲートで記念撮影



を受けたことを思い出した。それ以来の24年ぶりのアルナチャール再訪であった。

軍隊の駐屯地

バルクボンのチェックポストを過ぎると、あたりの風景は茶畑から深い密林に変わる。道路沿いには、いろいろな花が見受けられるようになり、ランも沢山見られる。ランの苗を育てているところや国立ラン研究所もある。

このあたりから、道路は1km毎に狭くなっていく。セサ (Sessa) という小さい村でお茶を飲んで一息つく。ここからは灌木の林の斜面と急な丘を登るようになるが、片側一車線もないほどの狭い道路になる。この山岳道路は軍隊の技術部隊の人々によってライフラインとして国境まで建設され、年間を通して保守されている。

軍隊の司令部のあるテンガ (Tenga) を過ぎて、もう一度テンガ川の橋を渡り、ルパ (Rupa) への分岐点を過ぎてボンディアラへの登りが始まる。10kmほどの間に約2000m近くの高度を稼ぎ、標高2938mの峠を越えたとしばらくで、この地域の中心である美しいボンディアラの村に着く。ここは標高2591mあり、チベット仏教の中心地の一つであり、また、宿泊するのに理想的な景色の良いところである。

ボンディアラにはりんご園やゴンパがあり、また、カメン谷 (Kameng) のすばらしい眺めが楽しめるところでもある。政府直営の民芸品売り場では、竜のデザインのカーペットとタンカ (仏画) などが土産物として即売されている。政府管轄の宿泊所であるサーキット・ハウスで一夜を過ごした翌

▼アルナチャール・ヒマラヤの西部。一番高いのがゴリ・チェン（6,858m）



日は、175kmの厳しい旅が続くことになる。

アルナチャール・ヒマラヤ

ボンディラを朝早く出発する。すぐに小さい峠を越えるがここから中国国境に聳えるアルナチャール・ヒマラヤ連山西部のパチャクシリ山脈（Pachaksiri）のパノラマが見える。ひととき高いピラミダルな純白の山はゴリ・チェン（Gori Chen）（6858m）であろう。見えている山々は、インドと中国の未確定国境のマクマホンライン上にあり、カントは1988年3月に同志社大学隊が中国側から初登頂した。

ゴリ・チェンは、1966年10月にインド隊が初登頂したといわれるが詳細は不明である。約20年後の1987年と1989年の秋に同じくインド隊が2峰（6488m）に初登頂した。しかし、主峰の第2登はずっと後の1991年になってアッサム連隊によって10月5日に果たされた。いずれもジャン（Jang）の村からタワン川の上流のゴルジョ・チュウ（Gorjo Chen）からのルートをとっている。外国隊としては1993年11月にオランダ隊がジャンから5日かかってBCに着き、2峰の東峰（第3峰）（6300m）に11月6日に初登頂した。

見えている雪の連山の西端の低くなったところが多分トゥルン・ラ（Tulung La）であろう。さらに西にはBUM・ラ（Bum La）（4331m）がある。これらを越えるとチベットである。いつかこのあたりの山を登山してみたいものである。

戦士の記念碑

アルナチャール・ヒマラヤ連山の展望台からビ

チョム川（Bichom）に下り、2時間のドライブで重要な空軍基地のある美しい谷間の町ディラン・ゾン（Dirang Dzong）に着く。ゾンとはブータンなどの地名に多いが、お城を意味する。この村にはお城のようなゴンパがあるからであろう。

ディランからさらに奥へ同じようなドライブを続け、橋を渡り、小川のあるところに着く。標高は3109mである。そこには24時間オープンしている軍隊の基地がある。茶店で暖かい飲み物とり、再び車の旅が始まる。

次の休憩地点は息をのむような景色のバイサキ（Baisakhi）である。標高は3479mでここはイギリスの探検家ジェームス・ヒルトンの小説「失われた地平線」にでてくるような山の中の楽園といったところで、まさに“桃源郷”である。

セ・ラの峠

バイサキを過ぎ、マルティ・ギュプスイ（Maruti Gypsy）まで登りが続く。だんだんと世界の屋根に近づいて行くような気分である。

ビチョム川とタワン川の間に横たわる大きな山脈を越えるところにセ・ラ（Se La）の峠がある。この峠はアルナチャール・ヒマラヤのなかで車の通行できる最高の峠で、標高は4136mである。峠ではアルナチャールの深い谷と樹林の山々のすばらしいパノラマを楽しむことができた。残念ながらアルナチャール・ヒマラヤは前山に隠れて見えない。峠には高地の道路建設で活躍した軍人の記念碑とお寺がある。

峠の向こうには凍った湖があり、続いて、寒々とした岩山の間を下る道になる。雪も深く、丁度、

日本の北のアルプスの残雪期の背景に似ている。道路は凍結していてスリップに注意しながら祈るような気持ちで下った。これ以上の降雪があるととても通過できないところである。

1時間ほど下ったところに軍隊のキャンプがあった。軍隊は写真撮影などのチェックが厳しいので立ち寄りたくない気持ちであったが、運ちゃんが休みたがり、やむをえず小休止することにした。小さなヒンズー教のお寺があり、僧侶がいた。軍人たちは意外に友好的で、お茶をご馳走してくれたり、付近を案内してくれた。

ここは、かつて、1962年当時、中国とインドの激戦地であり、ガワール・ライフル部隊による戦いがあったところである。そのときに勇敢に戦って無くなった戦士の記念碑があり、小公園になっている。現在でもトーチカの跡があちこちにある。小公園はジャスワント・ガール城（Four Jaswant Garh）と名付けられている。ブム・ラを越えてタワン川の対岸まで中国軍が攻め込んできて、谷を挟んでの攻防戦があったという。

水力発電所

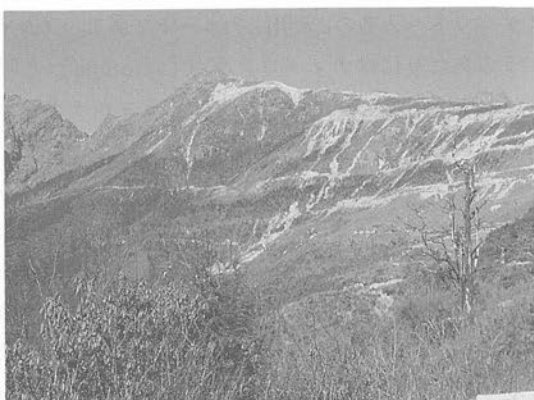
ジャスワント・ガール城からヘアピン・カーヴの連続でぐんぐん下ってタワンの谷に着く。その手前に大きな滝があり、そのそばに水力発電所がある。ヌランナン（Nuranan）という村である。ジャンの村の近くであり、前記のゴリ・チェン登山隊の出発地点となったところである。

ルボから私たちのエスコートとして同行してくれたK.C.ディモーレの部下である電気技術者のS.P.ヴァルマ（Varma）さんの案内でこの発電所は帰路に見学した。アルナチャールには7つの水力発電所があり、その一つである。

下りきったところでタワン川にかかる鉄橋を渡る。兩岸は切り立ったすばらしい岩壁である。

ここから緩い登りとなり、タワン川の西岸の高いところにつけられた道路を走る。民家が斜面に沿って建っている。このあたりの山には馬による通商のための道が屋根にそってブータンまで続いている。ジャンからは水平だが曲がりくねった道路通行許可書を持っていない人をチェックするチェックポストのあるクリム（Krimuh）まで続く。

▼セ・ラの峠、大きくじくざぐに登る



もう夕暮れで、そのせいかチェックポストは閉まっていた。さらに、登りは続き、途中からタワンや周辺の景色が眺められる。

ボンディラからタワンまでは10時間ほどのドライヴである。タワンに近付くと、道がカーブするごとに小さいが立派なゴンパが次々と現れる。

国境の村タワン

17時過ぎてもう真っ暗になってしまった頃、やっとタワンに着いた。情報警察に挨拶に行こうとしていると、それより先に、宿舎のサーキット・ハウスに情報局員だという2人が私服でやってきた。すでに連絡が届いているが念のために確認にきたという。このぶんではとても許可範囲以外の旅や山などには登れない状況であった。次の日には情報警察官と外国人登録事務所書員が数名きた。丁寧に応対して記念写真などを撮って友好につとめた。

サーキット・ハウスは政府の役人の出張のための宿舎であるが、驚くほど安い。ツインで40ルピー（約120円）である。私の泊まった部屋はVIPルームであったが、中央にマキ・ストーヴがあり、15畳くらいの広さだった。シャワー兼トイレもある。熱いお湯も出た。

タワンは斜面に広がった村なので標高を決めるのは困難だが、斜面の中腹にあるサーキット・ハウスの標高は2477mである。タワンはモダンな家、バザール、人工衛星通信所、学校などがあり、近代的な文化と伝統的な文化との最後の接点となっている。ここから先の北方には秘境チベットが広がっている訳である。タワンに通じているルート

は、かつての隊商やチベット旅行家がインドからチベットへ入るのに利用したルートである。ブム・ラのあたりにはティ・ゴンパ（T Gompa）と呼ばれているお寺があり、ダライ・ラマがチベットから亡命したとき、一時、滞在していたという。

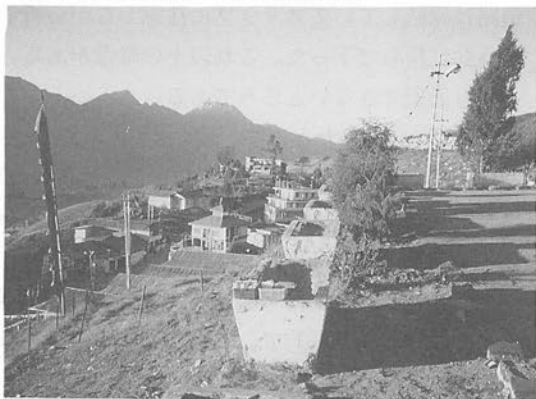
タワンは周辺を4000m級の山々に囲まれている。タワンの村の高度はハケ岳連山の高度とほぼ同じであり、宿舎の庭から眺めると、広い段丘に点在する民家は、昔ながらのアッサム独特の竹造りの家は少なく、コンクリート製のしっかりとした家が多いように見えた。住宅や道路が整備されているところから推測すると、軍事基地として政府や軍隊が相当テコ入れしているようである。他所と比較して税金も安い。日本人に似ている顔つきの人が多い。どこかで見たような人があちこちにいる。

世界第二のゴンパ

タワンは、有名な大きいマハラヤナ・ゴンパがあるところとして知られており、標高2760mの丘にある。チベットのラサにあるボタラ宮殿の次に大きいという。あたりの谷を見下ろせ、また、周辺の山々が眺められる屋根上のすばらしいところにある。このゴンパは1643年から4年間かかって、モンパ・ラマであるロドレ・ギャルツォが建立した。お城のようなこのゴンパは140平方メートルの広さがあり、壁面の長さは640mほどある。65の部屋があり、細い通路が沢山あり、各部屋やチョルテンを含む10ほどの建物をつないでいる。

モンパやシェルドックペンのゲルパ派の後裔が精神を高める生活をしており、500人ほどのラマ僧が住める3階建てのゴンパがある。現在は250名ほど僧侶が住んでいる。お寺の入口から中に入り、中庭に出るが、そこは宗教的な踊りやお祭りの野外授業が行われるところである。主扉にはすばらしい金細工が施されている。中庭からドクナン（Dukunang）と呼ばれる大広間に入ると、仏像とリンポチュ（僧正）の像などと共にいろいろな大きさの宗教画が沢山壁に掛けられている。天井は飾りのついた柱で支えられている。奥の部屋には仏の座像がある。お寺のそばには、住職の部屋や僧侶の僧坊や、古い経文などのある図書館

▼タワン村からブータン国境方面



がある。

私たちが訪れたときは朝であったが、丁度、2人の僧侶によってチベット風のトランペットが吹き鳴らされ、続いて太鼓が叩かれた。腹に響く音であった。その後に、大広間で小坊主の修行のための読教が始まるという場面にタイミング良く参加することができた。

この小さい村で一日過ごせば買い物も十分楽しむことができる。中国やチベットの製品がバザールで手にはいる。ククリと呼ばれるネパールのものと同様な蛮刀、ショール、飾りのほどこされたお茶のセット、民芸画などが手ごろな値段で買える。

近くの山のトレッキングやタワン・チョウの川下りなど、静かで、しかし、探検的要素のある楽しみがある。また、インド奥地に住んでいるお坊さんに彼らの人生哲学を聞けば、これからの生き方のヒントを得ることができるかもしれない。とにかく魅力的な観光要素は沢山ある。ただし、問題は特別入域許可である。

こんなところでのんびりと1週間くらい滞在したいと思う。旅はゆっくりに限る。車で村から村への急いでの移動は味気なく、片言の英語で運転手と茶店の人との会話くらいでは断片的な情報しかはいってこない。宿泊したり、買い物をしたりして、より多くの人々と接触することが豊富な情報を得ることができるのだが、時間がなくて残念である。

ガウハーティに帰る

帰路は同じコースで途中、ボンデイラ、デズプー

ルと各一泊してガウハーティに帰り着いた。町は兵隊が鉄砲をもってあちこちに立っていて、なんだか物々しかった。

実は、私たちの滞在していた期間のインドは政治的に不安定であった。すなわち、故ラジブ・ガンジーは1991年5月に暗殺されたが、その調査をしていたジェイン委員会（Jain Commission）の中間報告が国会に提出される前の11月上旬にインドの週刊誌India Todayがこのことをスクープしてしまい、それがきっかけとなって野党のBJP党はグジュラル首相に関係したと思われる3人の閣僚の辞任をせまったのである。グジュラル首相は与党の国民会議派をまとめて野党に妥協を求めて沈静化をはかったが収まらず、グジュラル内閣がR.K.ナラヤン大統領に国会解散を進言し、大統領は1997年12月4日にインド下院を解散した。総選挙は1998年3月頃までに行われる予定であるというような状況であった。

このようなことから政府や軍隊へのテロが発生していた。デイトルガールでも私たちが出発した次の日に軍の司令部でテロがあり、軍の要人が殺

されたという。もともとアルナチャールやアッサム地方は民族独立を要求する民族運動がさかんで、政府と民衆の摩擦が多いところである。観光客の入域を極端に制限しているのはそのせいもある。

これからのアルナチャール

月刊「インド」によるとインドの通信大臣B.P.バルマはインドの農村に通話を可能とする通信プロジェクトを50億ルピー（約150億円）をかけて計画中という。タウンにも直径5mほどのパラボラアンテナを備えた衛星中継所が建設中であった。インドのインフレ率も11月1日で約3%と少なくなってきた。近代化もすすんでおり、農村にも自動車やテレビが普及しているという。コンピューター・ソフトの輸出は120億ドルを越えているという。インドも大きく世界に羽ばたこうとしているようである。

中国、ブータン、ミャンマーなど隣国の友好関係が深まり、これらの国境の村々への旅や山々への登山が一般に解禁される日が近いことを祈らずにはおられない。



▲タウンのマハラヤナ・ゴンパ

ジャン・トロワイエと禅

住吉 仙也

日山協海外登山研究会に招かれた氏が、関西での講演会に戸高雅史、棚橋靖両氏と2月23日来阪された。ついでに禅寺と座禅に挑戦させよう。と正しい中老岳人二人は考えた。

我々二人には禅など全く興味関心はない。当然の事、禅をやったとか、やるなどと言ったら世間の嘲笑をかうばかりか、悪友の岳友達はキャツ等は狂った。とすぐ風潮するであろう。

しかし、不思議な事に禅寺にはこれまで何度も通ってはいた。ただ通ってたという方が正確である。

書けば長くなるので大省略して、この禅寺は高知の佐川町という高知市の西にある妙心寺派龍淵山青源寺の事である。住職は生玉道雄師（57）と

いい、住吉にとっては長年の友人である。

神戸の大地震で壊れた住吉家の四畳半炬燵の中で、焼酎を呑んだのが大西保君の因縁の出会いである。生玉師、本人はどう思っているか解んが、我々には大ソンケーする友人の一人である。とせねばならない。

師は加藤保男君の追悼集などを編集した事で承知の方もあろうが、ネパールに大層興味をもたれていて、何度も訪ねられている。またインドも…。

また我々ごとき岳人と称する輩をも愛される人でもあり、加藤保男君も生前たびたび同寺を訪ねたりしていた。

そういう訳で随分、我々も勝手に押しかけては無礼三昧、飲酒三昧を重ねて来た。イヤー申し訳ない。ひどい時は大晦日に高松の悪岳友のK君を突然訪ね、いやがる彼を禅寺へ誘い正月を禅三昧と過ごした事もある。勿論、我々三人は禅道とは少し外れ、酒道に年末年始を過ごした……。

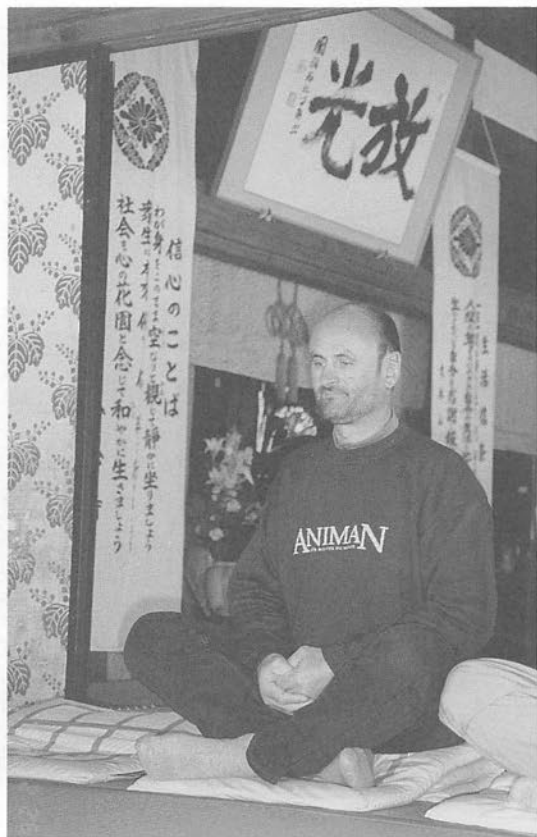
* * *

ジャン・トロワイエ氏は今回、京都も訪れ禅の予備知識のために竜安寺を見学した。この時に座禅という英文の本を買ってあげた。

ヨーロッパでも禅については知られているし、本人も非常に興味ある。と言ったので我々は今回は正統派禅研究という目的を生玉師に伝え、決して生魚、肉類や般若湯などはもってのほか、我々は今回は禅を知る目的であると小声で念押しの電話をした。「精進料理でね！今回は……」と。

なぜ禅かというと、勿論座禅を組んで悟りを開く。というのが一般的素人解釈だが抽象的過ぎて、どうも意味不明でもある。禅をして自然と一体になる。という事を知る。の方が解り易いかもしれない。

生玉師の説教の中で「自然になる」自分が登山している時「道具になる」「雪になる」「氷になる」



そして「山になる」。もっと大きく「自然になる」
そうして「一体になる」と諭された。

なんと素晴らしい表現と言葉ではないか。

ジャンもこの師の英語での説教で、目を輝かし
「ウン、ウン」とうなずき「僕もそうなってヒマ
ラヤに登る」と彼は言った。確か戸高もK2登頂
記にそんな風に書いていたっけ…。戸高君も禅を
勉強しているのかな？

* * *

ヒマラヤ登山は無論、登山もされていないが、
彼等の記録や考え方を知り、勉強もされている師
が、彼の考え方を知って、こんな事を言われるの
だろうか？

禅僧の考え深さからなのか。はたまた、ジャン
が禅を勉強していたのか？「フム!？」と考えて翌
朝、大西君ら4人は、朝5時に起床、すぐ廊下の
拭き掃除、朝食は梅干しとタクワンふた切れを時
鉢（じはつ）で採り、1日5回の座禅三昧をしつ
つ考えた。……と言うところで夢から覚めた。

4人とも二日酔いはひどかった。

正しくは翌朝、ジャンは棚橋君と二人、我々に

代わり二日酔いの頭でしびれを切らしながら、座
禅に挑戦したのであった。一方我々は前夜から吞
み続けた酒宴に、引き続き冷たいビールで朝食を
とり、近くの作り酒屋（司牡丹）見学へ早く行こ
う。と禅初心者二人に「禅もそこそこにしなさい」と促したのであった。

（編注）

外国人の表記は難しい。住吉＝トロワイ④、山
溪＝トロワイエ、岳人＝トロイエ。氏は1986年に
来日しているが、その時に「ヒマラヤ174号」の
「放談」に登場した。トロワレである。

ジャンは1975年から10年間、夏はスイスで登山
のガイド、冬はカナダでスキーのガイドを行い、
カナダの国籍をとった。ジャンの故郷はフランス
とイタリアの国境近くのスイスのオルジュールで
ある。従って2つの国籍を持っていることになる。

85年夏K2、冬ダウラギリI峰東壁、86年夏チ
モランマ北西壁から43時間で往復、90年春シヤ
パンマ南西稜初登攀、チャー・オユー南西壁初登
攀、91年マカルー西稜、94年ローツェ、95年カン
チェンジュンガ登頂と「山」を楽しんでいる。

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN
岳人

毎月15日発売（日・祝日の場合は前日）定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円

で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたら
お取り替えいたします。

98年

- ★ 1月号
- 2月号
- ★ 3月号
- 4月号
- ★ 5月号
- 6月号
- ★ 7月号
- 8月号
- 9月号
- ★ 10月号
- 11月号
- 12月号

特集

ぼくの好きな雪の山小屋で
粉雪わけて爽快山スキー
駅から登るとっておきの山
新緑と残雪を求めて5月の山
山の本、名作をめぐる春山紀行
高層湿原、もう一つの尾瀬へ
夏は北海道の花と溪流へ
真夏に涼を求めて、高原へ
初秋の単独行の山歩き
上信越の紅葉をさぐる
名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
冬山入門、心構えと特選コース

（★は特大号となります）

東京新聞出版局（中日新聞）
東京本社

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

ネパール・ヒマラヤ登山と環境（私見）

ネパール元観光大臣 ハルカ・グルン

今回の集いは、日本の登山家たちの集いとしては、非常に重要なものであります。冒頭にあってまず、今は亡き私の日本人の友人たちへ、哀悼を捧げたいと思います。 [※・原文はガルワール]

宮木 靖雅氏（ルンバ・サンバ* - 1962年） 樋口 明生氏（ヤルン・カン - 1973年）

植村 直己氏（エヴェレスト - 1971年） 水腰 英隆氏（エヴェレスト - 1988年）

今西 寿雄氏（マナスル - 1956年） 住吉 薫氏（クスム・カングル - 1983年）

1. 山への考え方

1963年4月、私はフィールド・リサーチでシクルス村へと向かっていた。アンナプルナⅡ峰とⅣ峰は曇っており、村の畑では実った麦の穂が波のように揺れていた。アンナプルナ地区は、年間降水量が3500mmと、ネパールの中でも最も降水量が多い地域であり、春や秋にはしばしば大量のヒョウやアラレが降る。そこでふと私は、グルン族の少女たちのグループが「このよそ者は悪い前兆だ」と話しているのを耳にした。この村人たちは「この時期にくるよそ者は、作物をダメにする大量のヒョウやアラレをもたらす」と信じている。少女たちに「私はよそ者でなく近くのラムジュン村から来た同じグルン族だよ」と伝え、少女たちも納得してくれた。そして、ヒョウやアラレも降らなかった。

しかし、1954年春、今西錦司隊長率いる日本隊がアンナプルナⅣ峰の偵察にシクルス村を訪れた時にはそうはいかなかった。彼らの訪問によってヒョウやアラレの嵐は起こらなかったものの、日本隊は山の神の怒りをなだめる保険として、村に何ルピーかの料金を支払わなければならなかった。同じ頃、別の日本隊がマナスルの麓のサマ村の村人の怒りを買った。一連の日本隊のマナスル登山が、村の一部を襲い被害を出した雪崩の原因だと非難されたのだ。しかし、日本隊の隊員たちは、典型的な東洋風礼儀でこれに応じた。村人たちの迷信的な信心を、合理主義的な西洋人らのように

笑い飛ばす代わりに、村人たちの行動を真摯にとらえ、隊員の村木潤次郎氏は「マウンテン・ワールド」誌に「信仰深き人々の反乱」と適切な意見を述べている。

日本人のこのような山に対する信仰心は、一体どこから来たものなのか。私はその答えをシュワート・D.B.ピッケン著「Essentials of Shinto, An Analytical Guide to Principal Teachings (神道の本髄；その主要教義への分析ガイド)」に見出した。この本の説明によれば、神道（ShinもしくはKami=神；toまたはdo=道）というのは、神の道を意味している。ヒマラヤの民たちが、自然の要素を善の神、悪の神と信じているのと同じように日本人も山（Sangaku）を神として考え、特別の敬意を払うのである。古代日本人の宗教は、山への憧憬に大きく基づいており、山に登ることや山に住むということは、精神世界や禁欲生活と結び付いていた。

山岳崇拜修験道の最も有名な聖人は、7世紀の続日本記に出てくる伝説的な役小角である。伝説的人物としては他に、比叡山の僧（831～918）、天台宗の円珍（814～891）などがある。同様に修験道と関係深い主な山岳地域としては、大山、出羽三山、白山、石鎚、葛城、金峰山、熊野、日光、立山などがある。

2. 日本人による冒険・遠征・調査

よって、日本人がヒマラヤの神秘や挑戦に憧れ

るのは、驚くべきことではない。そのパイオニア的存在は、1899年にネパールに入り、ムスタンのチャラン・ゴンパで11ヶ月を過ごし、その後チベットに3年間滞在した河口慧海師である。彼の使命は仏教探求であり、そのために彼はドルポやチベットの多くの山々を越えなければならなかった。来年1999年、マルファ村の村人たちは河口師の訪問1世紀を記念する行事を予定している。

過去50年間に、日本から膨大な数の遠征隊がネパールにやって来た。それらの多くは登山遠征であった。その中でも最も長い人気を誇ったのが、マナスルとヒマルチュリであり、それぞれ1956年、60年に初登頂された。それ以来多くの日本の遠征隊が、主要峰（エヴェレストの女性初登頂を含め）で成功をおさめてきた。ランタン・ヒマールには、日本の登山家の名にちなんで付けられた「モリモト・ピーク」という日本語の名前の山がある。

登山が非常にドラマティックなイベントである一方、より地道な活動は学術的探査である。日本から派遣された多くの学術遠征隊は、ヒマラヤの自然や文化に関しての我々の知識をより豊かにしてくれた。京都大学の生物誌研究会は1952年、53年と2回にわたり、大規模な学術遠征隊を派遣した。遠征隊は中央ネパールの辺鄙な山岳地帯を訪れ、人類学、植物学、文化、経済などの調査を行い、その成果は3巻の本にまとめられた。これらの遠征の後、すぐに今度は川喜田二郎教授率いるカリ・ガンダキ谷、ドルポ地区の文化人類学の調査遠征隊が送られた。川喜田教授はその後モシカ谷におけるATCHAプロジェクトを通して、その研究分野を広げた。同様に、千葉大学の沼田真教授とそのチームは、東ネパールの植物学研究に貢献した。その他の日本人による重要な学術調査隊としては、北海道大学の地質学研究チーム、名古屋大学の樋口敬二教授に率いられた氷河学研究チームなどがある。東京大学アジア・アフリカ言語文化研究会も、ヒマラヤの民の生活に関して多大な調査を行った。

また、写真や映像はより長く続くインパクトを持つ。この分野で日本人による写真集としては、白川義員著の「Himalayas (1971)」、白旗史郎著の「Nepal Himalaya 1983年」、地図本では吉沢

一郎編の「The Himalayas (1977)」などがある。ヒマラヤの美しさや壮大さを伝えるには、やはりビジュアルが一番効果的である。

3. ネパール・ヒマラヤの山々

ネパール・ヒマラヤは、ヒマラヤ山脈のちょうど中央に位置し、全体の長さの3分の1にあたる800kmである。それはいくつかの山脈の集合体であり、その中には多くの高峰が連なっている。山々のリストには6000mを超える1300のピークがある。表1は山脈、カテゴリー別のそれらの山々のクラス分けである。1310峰の内、17座が8000m峰である。その内10座がマハラングール山群に、4座がカンチェンジュンガ山群に、そしてマナスル、アンナプルナ、ダウラギリ山群にそれぞれ1座が属している。そして準8000m峰（7500m-7999m）は40座。その内2ダースがマハラングール山脈、残りがマナスル、アンナプルナ、ダウラギリ、カンチェンジュンガの各山群に属している。

7000m-7499mの標高の山は、トータル87座。そのほとんどは東及び中央ネパールにある。6500m-6999mの山は298座で、これも東と中央にある。最後の6000m-6499mの山は868座で、その内の44.2%は中央に、31.8%は東に、24%は西にある。

全体的に見ると、6つの山脈からなる中央部に1310座の内、43.7%が、東の3つの山脈に37.9%が、西の3つの山脈に18.4%の山々が属していることになる。山脈を個別に見ると、マハラングールの219座が最も多い。(16.7%)、次がカンチェンジュンガで180座(13.7%)。マナスルが141座で続く。

リストに載っている1310座の内、5分の1に相当する259峰に名称がある。名前のある山のパーセンテージは、標高が高いほど高い。逆に無名峰の割合は、標高が低いほど高い。このため8000m峰の17座の内、無名峰はわずかに5座にすぎない。(訳注：これらは主峰ではなくその肩的存在のピークである。)一方、6500m-6999mの山の4分3、6000m-6499mの山の90%が無名峰である。このようにネパール・ヒマラヤは、文字どおり、いろいろな山がごたごたになっており、その中にはまだ、探査・登頂されていない山が残っているのだ。

(表1) ネパール・ヒマラヤ標高別・地域別分布表

(地区名) 山 脈 名	標 高 別 山 峰 数					合 計	%
	8000m上	7500m上	7000m上	6500m上	6000m上		
(東ネパール)	1 4	2 6	4 6	1 3 5	2 7 6	4 9 7	37.9
1.カンチェンジュンガ	4	2	2 2	4 3	1 0 9	1 8 0	13.7
2.マハラングール	1 0	2 4	2 3	5 8	1 0 4	2 1 9	16.7
3.ロールワリン他	—	—	1	3 4	6 3	9 5	7.5
(中央ネパール)	3	1 4	3 8	1 2 8	3 6 4	5 6 7	43.3
4.ランタン他	—	—	6	3 2	5 3	9 1	6.9
5.ガネッシュ他	—	—	6	1 7	6 3	8 6	6.6
6.マナスル他	1	5	9	4 4	8 2	1 4 1	10.6
7.アンナプルナ他	1	5	8	1 7	7 5	1 0 6	8.1
8.ムスタン	—	—	—	1	7 6	7 7	5.9
9.ダウラギリ	1	4	9	1 7	3 5	6 6	5.0
(西ネパール)	—	—	3	3 5	2 0 8	2 4 6	18.4
10.カンジロバ	—	—	—	6	2 9	3 5	2.7
11.ドルボ他	—	—	—	1 4	1 2 3	1 3 7	10.5
12.アピ、サイパル他	—	—	3	1 5	5 6	7 4	5.6
合 計	1 7	4 0	8 7	2 9 8	8 6 8	1 3 1 0	100.0

出典：1994年観光省発行「Nepal Himalaya Inventory」ハルカ・グルン、R.K.シュレスト共著

4. 戦場から遊戯場へ

登山家によるネパール・ヒマラヤの最初の探検は、1899年にさかのぼる。ダグラス・ウィリアム・フレッシュフィールド率いる、イギリス隊がカンチェンジュンガを一周したのが最初だった。その後、1925年から27年にわたって探査され、ほとんどの高峰が記された4分の1インチの地図が出来上った。しかし、ネパールへの外国人の立入りは禁止されていた。1936年にアーノルド・ハイムとオーガスト・ガンサーの2人のスイス人が、チベットのカイラス地区に行く途中、ネパール最北西のティンカール谷を内緒で訪れた。ネパールが登山者に開放されたのは、1949年のことで、この年、アーノルド・ハイムがダウラギリを、スイス隊がカンチェンジュンガ地区、イギリス隊がガネッシュ山群、クーンブ山群、アンナプルナ山群の北側を探検した。

1950年に行われたアンナプルナ I 峰の歴史的な初登頂は、ネパール・ヒマラヤのみならず、世界で初めての8000m峰の登頂となり、これをきっかけにネパール・ヒマラヤは戦場の様相を呈してき

た。その後、ネパールは登山ラッシュの時代を迎え、わずか10年の間に8つの8000m峰が征服された。いろいろな国が有名な山に対して、感情的に登山許可の権利を主張した。フランスはアンナプルナとマカルーに、イギリスはエヴェレストとカンチェンジュンガ、日本はマナスルとヒマルチュリ、スイスはローツェとダウラギリ、オーストリアはチョー・オユーに。1960年のエヴェレストには、北側から中国、南側からインドが挑戦した。

登山はネパールにとって、観光開発の主要な要素となった。1965年～68年の空白期間を除いて、高まる外国の圧力と歳入の必要性により、登山隊に開放される山も段々増え、遠征も多く許可されるようになってきた。表2は1986～95年の10年間の登山遠征の現状を纏めたものである。この間トータル1063隊、8575人の登山者がネパールを訪れている。89年から92年の間、遠征隊の数は増えたが、その後その数は減っている。1隊の構成人数は平均すると8人ほどである。近年では、アルパイン・スタイルの小規模登山隊の増加に伴い、1隊あたりの構成人数の平均は減少している。言い換えれ

ば、国を代表するような登山隊から、プロの登山家の遊戯場への変換である。これはまた、登山隊に雇われるポーター、ベース・キャンプ要員、ハイ・ポーターの減少をも意味する。この10年間に雇用されたのは88,845人であるが、登山家一人当りの数は、86年の12.9人から、95年の8.3人へと減少している。

86年～95年に訪れた1063隊の登山隊は、総額1億8800万ルピーの登山料を支払っている。登山隊1隊当たりの平均額は、176,995ルピーであるが、これは年によってかなり違いがあり、86年は平均43,223ルピー、95年は平均409,967ルピーと約10倍になっている。登山料の値上りは、92年以来特に顕著になっており、86年～95年の10年間の総額の実に80%が92年～95年に徴収されたものである。

政府に支払われる登山料の他に、登山隊は輸送費や食糧費として、地元金を落としている。86年～95年の間、そういった支払い額は総額8億2900万ルピーと登山料の総額の4.4倍以上になっている。登山隊の支払い額は、91年を境に急激に増えていて、雇用する人の数の激減が同年に起きたことと、合い反する結果になっている。言い換えると、90年以前は、雇用人数が多かったが支払いは少なく、91年以降は、雇用人数は減ったが支払いは増えたということである。この矛盾は、登山活動の性質の変化によるものだろう。例えば、近年は、ポーターの代わりにヘリコプターで物資を輸送する登山隊が多い。これも雇用者の減少・支払い額の増加の一因であろう。

(表 2) ネパール・ヒマラヤ10年間の推移

年	登山隊数	登山者数	雇用者数	登山料(千Rs)	隊費用(千Rs)
1986	94隊	807人	10415人	4063	28854
1987	98	796	11166	4330	34020
1988	92	936	10839	5079	42583
1989	125	1053	10984	7222	63976
1990	120	966	12179	7266	68368
1991	130	1038	9154	8929	156363
1992	113	929	8251	30351	101355
1993	95	730	5423	39101	103804
1994	105	696	5239	44498	113501
1995	91	624	5195	37307	116600
合 計	1063	8575	88845	188146	829424

出典：1996年発行、大蔵省による経済調査1995～96年号。43ページ表3.16より。

5. 登山活動

1994年にネパールを訪れた登山隊を例にとって、登山活動を見てみよう。その年は107隊、697人の登山者がネパールを訪れた。この内、80隊が秋(夏を含む)に、19隊が春、8隊が冬にやってきている。登山許可は9つの山群の33座に出された。季節別の登山者は、秋に527人、春117人、冬53人である。登山隊登山者の4分の3が秋(夏)に集中していることがわかる。

その年の107の登山隊の内、58.9%に当たる63隊がクーンブ地区に向かっている。次に人気のな

はアンナプルナ地区で14隊、3番目が11隊のダウラギリ地区である。94年はアマ・ダブラム峰が17隊、プモ・リ隊が14隊と最も人気があった。他に登山隊を集めたのはバルンツェ9隊、エヴェレスト8隊、ダウラギリ8隊などであった。

その年は、登山料は総額906,700ドルであった。季節別では、この54.8%が秋に徴収され、春は42.3%。冬はわずか2.9%という割り合いになっている。地域別では、登山料の4分の3はクーンブ地区の山々の分である。その他では、ダウラギリ9.1%、ナンナプルナ地区6.1%である。

全体的に見ると、東ネパールの山群からは登山料の総額の81%、中央ネパールの山群から19%が徴収されている。西ネパールの山群には、その年1隊も登山隊が入らなかったため登山料収入はゼロである。

スポーツとしての登山は、裕福な人々の特権である。この事実は、1994年秋の登山活動に関係した国々をみれば明らかだった。この年はネパール・ヒマラヤには30ヶ国がやってきた。この内、18ヶ国が高所得国に、4ヶ国がアッパーミドル所得国に、7ヶ国がロウワー・ミドル所得国に属し、低所得国にあたるのは、ネパール1ヶ国にすぎない。「World Development Report-1997（世界開発レポート1997年）」に載っている183ヶ国のトップ10にあたる国々の実に7ヶ国が、94年の秋にネパールに登山隊を送っている。この7ヶ国というのはスイス、日本、ドイツ、アメリカ、オーストリア、フランス、ベルギーである。これらの国はすべて国民1人当たりの国民総生産額が24,000ドルを超える国々である。

ネパールに登山隊を送った18の高所得国のうち、12ヶ国が西ヨーロッパ、2ヶ国が北米、2ヶ国が南太平洋、2ヶ国がアジアに属している。アッパーミドル所得国4ヶ国の内、2ヶ国は東ヨーロッパ、そして中央アメリカ、西ヨーロッパのそれぞれ1ヶ国である。これらの国々の国民1人当たりの国民総生産は3,320～8,210ドルである。ロウワー・ミドル国の7ヶ国の内、6ヶ国が東ヨーロッパ、1ヶ国がアジア（インドネシア）である。これらの国々の国民1人当たりの国民総生産は980～2,790ドルである。ホスト国であるネパールが、低所得国に当たるたった一つの国で、国民1人当たりのGNPはわずか200ドルにすぎない。

1994年秋に登山隊を送った30ヶ国の内、13ヶ国が西ヨーロッパ、8ヶ国が東ヨーロッパ、4ヶ国がアジアに属している。北米と南太平洋からは、2ヶ国、中央アメリカは1ヶ国である。

75隊中53隊は単一国隊（18ヶ国）で、その殆どは高所得国からの登山隊である。日本とフランスから各8隊、ドイツと韓国から各5隊、スイス、スロヴェニア、スペインから各4隊、オーストリアとイギリスから各3隊、他9ヶ国から1隊ずつ

隊を出している。

合同登山隊は増加傾向にあり、1994年秋期には19隊の合同隊があった。その内、2ヶ国の合同隊は8隊、3ヶ国の合同隊7隊、それに4ヶ国の合同隊は4隊であり、23ヶ国が関係している。アングロ・サクソン系からはオーストラリア／ニュージーランド／イギリス、イギリス／アメリカ、スラヴ系からスロヴァキア／ベラルーシ／ブルガリア／ロシア、ドイツ系からオーストリア／ドイツ、フランス系からフランス／イタリア／スイス、カザフスタン／アメリカやイタリア／ポーランド／ポルトガル／アメリカといった異色の組合せの合同隊もある。

75隊中42隊は登頂に成功しているが、残る33隊は試登に終わった。単一国隊での成功した隊は30隊、23隊は試登、登頂に失敗した隊の3／4は単一国隊である。合同隊もしくは国際隊の成功率は高く、登頂14隊に対して試登8隊である（注：複数登頂隊がある）。日本隊の登頂率が最も高く、8隊全てが成功している。フランスと韓国が関わった合同隊並びに両国の単一国隊がこれに続く。

近年ネパールを訪れる登山隊の数は本当に多くなった。1995年には登山隊の数が22隊だったのと比較すると、1997年春季だけでも56隊418人もの登山隊があった。23ヶ国の内複数の登山隊を派遣している国は10ヶ国である。イギリス隊はエヴェレストへの4隊を含む12隊、ロシア隊は5隊、オーストラリア、イタリア、日本から各4隊、ニュージーランド、韓国、アメリカから各3隊、そしてスペインからは2隊あった。

登山対象となった18座の内13座は東ネパール、4座は中央ネパールである。クーンブ地方の9座には32隊が挑んだ。最も人気のあったのはエヴェレストで13隊が、ダウラギリI峰とカンチェンジュンガにはそれぞれ7隊、ローツェには6隊が入山した。中央ネパールには65名、東ネパールには340名の登山者が入ったが、西ネパールにはわずかに6名が入っただけである。登山隊のこのような地域的な広がり不均衡は、人気のある地域の混雑を引き起こしている。

ここ十数年間、日本隊のヒマラヤでの登山や踏査は大変活発である。1980年にはヒマラヤ各地に

(表3) ネパール・ヒマラヤ山別シーズン別入山数と登山料 (1994年)

山群と山名\シーズン	春 期			秋 期			冬 期		
	隊数	人数	U S \$	隊数	人数	U S \$	隊数	人数	U S \$
I アンナ/ダウラ	1	7	8,000	21	150	112,000	3	17	18,000
1.アンナプルナ I				2	15	19,200	1	9	8,000
2.アンナプルナ III				2	17	7,600			
3.アンナプルナ IV				2	13	6,000			
4.アンナプルナ S							1	7	2,000
5.タケ・カン				2	9	4,000			
6.ティリツォ				4	33	8,900			
7.ダウラギリ I	1	7	8,000	8	59	64,800	1	1	8,000
8.ツクチェ				1	4	1,500			
II カンチェンジュンガ				3	27	23,000			
9.カンチM				2	23	20,000			
10.クンパカルナ				1	4	3,000			
III クーンブ	16	90	362,400	45	273	334,300	2	9	3,000
11.アマ・ダブラム	3	14	4,900	13	72	21,900	1	5	1,500
12.バルンツェ	2	11	4,000	7	49	15,300			
13.チョラツェ				2	12	2,200			
14.チョー・オユー	2	11	17,600	2	13	18,400			
15.カンテガ							1	4	1,500
16.ローツェ	1	7	9,600	4	28	24,800			
17.ヌプツェ				1	4	3,000			
18.プモ・リ	3	15	6,300	11	57	25,300			
19.エヴェレスト	5	32	320,000	3	26	220,000			
20.タウチェ				2	12	3,400			
IV ランタン/ガネッシュ	1	14	1,500	5	33	9,500	3	27	5,500
21.ランタン・L				1	4	2,000	2	20	4,000
22.ドルジェ・ラクパ				1	6	1,500	1	7	1,500
23.ランシサ・リ				1	2	1,000			
24.ウルキン・マン	1	14	1,500						
25.ガネッシュ V				1	7	1,500			
26.チャマル				1	14	3,500			
V 27.マカルー	1	13	11,200						
VI マナスル				5	35	16,800			
28.ギャジ・カン				1	15	2,300			
29.ヒマルチュリ				1	5	3,000			
30.ヒムルン				1	4	2,000			
31.カン・グルー				1	4	1,500			
32.マナスル				1	7	8,000			
VII 33.カータン				1	9	1,500			
合 計	19	117	383,100	80	527	478,700	8	53	26,500

54隊の日本隊が足を運んだ（日本ヒマラヤ協会-HAJ-山森欣一氏調査）。その内訳はインドへ20隊、ネパールへ19隊、パキスタンへは10隊、そして中国へは5隊である。1995年には46隊の日本隊があったが、出かける国が変わってきている。中国が主目的となってきた16隊、次いでインドに12隊、パキスタンに10隊、そしてネパールには8隊である。かつては一番の目標とされていたネパール・ヒマラヤは、既にどこか新しい場を提供するという優先権を失ってしまっていた。また、登山は死亡率の高い、リスクを伴ったスポーツである。HAJのデータによると、1952年～1996年の間に235名の日本人登山者がヒマラヤで死亡している。その50パーセント近くは雪崩、33パーセントは転滑落、そして7.2パーセントは高山病で生命を失っている。

6. 環境保護

ネパール・ヒマラヤを含む大半の山岳地域では環境破壊や汚染が進んでいる。直接的な原因は登山、トレッキングの人気ルートにおいて樹木の伐採やゴミの増加による汚染であった。根本的な問題は特定の地域や季節に訪問者が集中していることやマネージメントの不足である。ネパール・ヒマラヤにおける自然環境の破壊や汚染を防ぐための解決手段として(1)地域を分散(2)季節を分散(3)受益者負担、などの方法が考えられる（“ネパール登山における環境管理-ESCAP調査報告”1991年ハルカ・グルン著）。

1) 地域の分散

ヒマラヤの山岳環境に対する悪いイメージの大半は限られたオーバーユース地域で発生する諸問題に起因する。1995年にネパールを訪れたトレッカーの60パーセントはアンナプルナ山群に集中した(表4)。また、18.6パーセントはクーンブ地方を目指した。再び1994年の登山隊に話を戻すと、107隊の内68パーセントが東ネパールへ入っている。クーンブ地方が特に混雑がひどく、63隊が入っている(表3)。大量の訪問者を合理的に規制するために、地域を拡散することを提案する。登山料の格差や新たな地域や山の解禁などが考えられる。具体的に言うと、オーバーユース地域でのトレッ

キング料や登山料の値上げなどをして、登山隊やトレッカーの数を調整する。それと同時に、新しいトレッキング地域の開放や登山許可峰の追加など、特に西ネパールにおいての新しい開放が必要である。現在、ネパールの解禁峰142座の内、西ネパールの山はわずか24座にすぎない。ムスタン、ドルボやフムラには多くの未踏峰がある。1979年から中国は自ら登山の奨励を奨めてきたが、かつての保護された環境は変化したばかりではない。トレッキング隊や登山隊は、魅力的な新しい地域に眼を向けるべきである。

2) 年間入域者の平均化

混雑のもうひとつの原因は登山の季節にある。トレッキングについては、全体の半数が10月から12月に、1/4が3月から4月に集中している。6～7月にはわずか2パーセントにも満たない。同様に、登山隊の殆どは秋期に集中し、冬期登山を試みる隊は極少数である。天候の確かな季節は登山に、より有利であるが、方法を考えれば他の季節の登山も推進可能である。ヒマラヤ全体を考えると、モンスーンの季節でも比較的雨の少ないムスタン、ドルボ地方ではトレッキングを楽しむことができる。加えて、トレッキング許可料も人気シーズンは高く、オフ・シーズンは安くするべきである。登山においても秋期の登山料は高く、その他のシーズンは安くすべきである。言い替えば、登山者やトレッカー側も、人気シーズンのトレッキングや登山には、より高額な料金を支払うか、さもなければ断念すべきである。さらに、このような過密なトレッキング地域及び山々では、そこで得られるインフラ関係にしたがって、季節的に最適な登山隊の数にすべきである。

3) 受益者負担

環境管理には経費がかかる。現行では訪問者からの徴収金は相当額となり増収も見込まれるので、登山やトレッキングの場となる豊かな自然の保護に存分に使用できる。1995年には登山やトレッキングの許可料の総計は330万ドルに及んだ(表4)。このうちの54.4パーセントは国立公園入園料、24.1パーセントはトレッキング許可料、17.1パーセントは登山料、そしてトレッキング許可峰の登山料は4.5パーセントであった。一人当たりからの

収入はトレッカー9.5ドル、登山者では915.9ドルであった。

1995年の収入の内、618,583ドルのアンナプルナ国立公園入園料はアンナプルナ環境保全地域計画（ACAP）へ、そして156,000ドルあったトレッキング・ピーク許可料はネパール登山協会（NMA）へ収められた。残る登山料やトレッキング許可料、それにアンナプルナ国立公園以外の地域の公園入園料2,577,744ドル（77％）は大蔵省に入った。貧しいヒマラヤ諸国の政府には財源が必要であり、また、登山やトレッキングに対する積極的な政策を支持することが必要である。しかしながら、政府と収入を得られる諸地域間で収入を分割する継続的な方法が望まれる。この地域

での多数のトレッカーの存在は、環境へ更に多くのストレスを与えると同時に、多数のトレッカーの訪れに比例して収入はより増える。そこで、もしある地方の収入の半分がその地方に維持されるなら、その費用は環境の保全や地域の振興に役立てられるであろう。そのような動きは経済的に不利な山岳地帯での雇用を促進させる。山々は一部の人たちの遊びの場であると同時に、貧しい人々の生活の場であった。この両者間の協議により、ユーザー収入を、地域住民を全面的に巻き込んでの環境保全に直接注入することにある。

1998年1月15日

クアラ・ルンプールにて

（表 4）1995年地域別収入

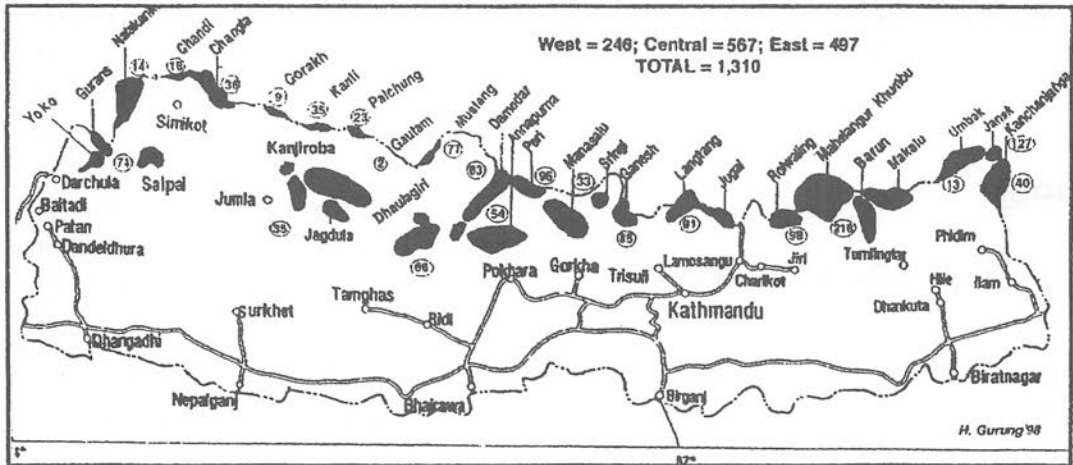
地 域	登 山 料		トレッキング峰登山料		トレッキング許可料		公園入園料		計	
	US\$	%	US\$	%	US\$	%	US\$	%	US\$	%
1.アンナプルナ	29,500	5.2	20,100	13.4	500,120	63.1	618,583	34.0	1,168,303	34.9
2.クーンブ	383,000	67.0	96,450	64.3	149,970	18.6	239,700	13.2	869,120	26.0
3.ランタン	5,500	1.0	6,750	4.5	42,135	5.2	97,515	5.4	151,900	4.5
4.その他	153,500	26.8	26,700	17.8	113,510	14.0	863,294	47.4	1,157,004	34.6
5.計	571,500	100.0	150,000	100.0	805,735	100.0	1,819,092	100.0	3,346,327	100.0
%	17.1		4.5		24.1		54.4		100.0	
人数	624		3,046		84,787		136,142		224,599	
料／1人	\$ 915.87		\$ 49.24		\$ 9.50		\$ 13.36		\$ 14.90	

出典：1.1995年ネパール観光統計表、ロイヤリティ収入地域（ピタムバール・シャルマ調査）

2.NMA機関誌“パルパットICM”97特別号

3.1995年ネパール観光統計表には地域ごとの許可数を掲載

ランタン地域へのトレッキング許可取得手数料は5ドル／1週間、他地域は10ドル／2週間
ムスタン北部、マナスル、ドルポ地域は資料不足のため掲載せず



地域ニュース

《パキスタン》

ビザ申請情報

パキスタン大使館によれば、大使館公休日の土曜日と日曜日以外に、ビザセクションは水曜日も公務を休止するとの事。登山関係のビザは申請日から中2日おいた4日目の発給となる。土日祭日はこれに含まれないので、申請する場合には注意のこと。

植民地時代の州名葬れ

英国による植民地統治時代の名前は葬れー。パキスタンの北西辺境州で、多数派パシュトゥン民族の地域政党・アワミ国民党（ANP）が、州名を同民族の名にちなんで「パシュトゥンカー」と改名するよう中央政府に要求している。同州には他民族もいるためシャリフ政権は消極的。ANPが反発し、政情の不安定を招いている。

パキスタン4州のうち他の3州の名前は民族名にちなむ。唯一「辺境」と呼ばれることに、パシュトゥン民族の反発は強い。

パシュトゥン民族は、同州からアフガニスタンにかけて住む。アフガンのイスラム原理主義勢力タリバーンの大半もこの民族だ。タリバーンの勢力伸張と軌を一にした民族主義の高まりが背景にあるとみられる。

英植民地時代の地名を変える動きは、隣国インドでも数年前から活発で、すでにボンベイがムンバイ、マドラスがチェンナイなどとなった。

（3.19 朝日新聞）

《中国》

チベット登山隊8座に登頂

1. ツェリン・ドルジェ

1988.5. 5	チョモランマ	8,848m
1993.4.26	アンナプルナ I	8,091m
〃 5.30	ダウラギリ I	8,167m

1994.5. 7	シシャバンマM	8,027m
〃 9.30	チョー・オユー	8,201m
1995.7.10	ガッシャーブルム II	8,035m
1996.5. 3	マナスル	8,163m
1997.6.15	ナンガ・パルバット	8,126m

2. レンナ

1990.5	チョモランマ	8,848m
1993.4.26	アンナプルナ I	8,091m
〃 5.31	ダウラギリ I	8,167m
1994.5. 7	シシャバンマM	8,027m
〃 9.30	チョー・オユー	8,201m
1995.7.11	ガッシャーブルム II	8,035m
1996.5.3	マナスル	8,163m
1997.6.15	ナンガ・パルバット	8,126m

《ブータン》

1998年お祭りリスト

名 称	
ブナカ・ドムチェ	3月3日～6日
ブナカ・セダ	3月7日
ゴムコラ・ツェチュ	4月4日～6日
パロ・ツェチュ	4月7日～11日
チュカ・ツェチュ	4月4日～6日
ニルマン・ツェチュ	7月2日～4日
クジェラカン・ツェチュ	7月4日
ウォンディフォダン・ツェチュ	9月29日～10月1日
タムシンパーラ・チョバ	9月30日～10月2日
ティンブー・ツェチュ	10月1日～3日
タンビ・マニ	10月4日～6日
ジャンベラカン・ドゥブ	11月4日～8日
ブラッカール・ツェチュ	11月4日～6日
モンガル・ツェチュ	11月27日～29日
タシガン・ツェチュ	11月28日～30日
トンサ・ツェチュ	12月26日～30日
ルンツイ・ツェチュ	12月27日～30日

※祭の日程は変わることがあります。

[ブータン第58号 (1997.12.20)] より

トピクス

大塚、松田両氏ヒマラヤン・クラブ名誉会員に

このほど大塚博美・松田雄一両氏がヒマラヤン・クラブの名誉会員となられた。

大塚博美（ひろよし）氏は1924年10月1日東京生まれで現在74歳。明治大学山岳部OBで、48年日本山岳会（JCA）へ入会、69年ヒマラヤン・クラブ会員となる。

54年のJAC第二次マナスル登山隊、56年第三次隊に参加、自ら北東稜上に新ルートを開き、7,900メートルの高さに到達、マナスルの初登頂に大きな貢献を果たされた。

70年にはJACエヴェレスト登山隊を率い、同峰の日本隊初登頂を成し遂げた。なお、この隊は南西壁の8,100メートルまでルートを伸ばしている。

また、85年～88年のJAC副会長時代には、88年日中ネ三国合同チョモランマ隊の日本側副総隊長を務められ、世界最高峰の南北縦走を成功させている。

氏は、1984年に冬期マッキンリーの単独登頂後に行方不明となった、故植村直巳氏を始めとする多くの日本人ヒマラヤニストや探検家を、全面的にサポートしてきた。現在植村直巳財団の理事を務められている。

三田幸夫氏亡き後、87年からヒマラヤン・クラブ日本支部長を務められた。

一方、松田雄一氏は1930年5月2日東京生まれで現在68歳。52年日本大学理工学部卒業後、JACに入会、54年JAC第二次マナスル登山隊、56年第三次隊に参加、JACヒマルチュリ隊副隊長、70年JACエヴェレスト登山隊副隊長、95年日本大学チョモランマ北東稜登山隊副実行委員を務められた。

大塚博美の後任として、現在ヒマラヤン・クラブ日本支部長を務められている他に、日本ネパール協会終身会員、日本山岳協会顧問（評議員）、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト監事、日本大学アルムニ山岳会会長の肩書がある。

なお、これまでにヒマラヤン・クラブの名誉会員の称号を送られた日本人は、故三田幸夫氏と稲田定重氏の二人だけである。

ヒマラヤン・クラブは1928年2月17日に創設、今年70周年を迎えた。会員は世界各国におり、その数は凡そ9百人、カラコルムやヒンドゥー・クシュを含むヒマラヤ全般についての情報センターの役割をも果たしている。会の年報でもある「ヒマラヤン・ジャーナル（HJ）」はヒマラヤ各地における登山や探検の記録を丹念に拾い上げており、資料としての価値も高い。

インド国内にある11の支部の他、世界各地に19の支部を持つ。

山田昇十年祭開かれる

1989年2月、冬のマッキンリー登山中に小松幸三、三枝照雄両氏と共に遭難死した山田昇氏の十年祭が3月22日群馬県沼田市の自宅墓地で開かれた。

当日は、地元群馬岳連、沼田山岳会、HAJ、山麓会など岳人を中心に約80名が出席。墓地前で執り行われた十年祭では神主の祝詞の後、全員が玉串を供えて祭を終えた。

その後、場所を春日殿に移して、来日中のアン・ドルジェと宮崎勉両氏のエヴェレスト街道の解説を交えて、追悼懇親会が行われた。

BOOKS

ミニヤ・コンカ初登頂

戦前の1932年にミニヤ・コンカにたった4人で初登頂したアメリカ隊の記録。出版から60数年経ってから日本語に翻訳された。もっと早くに日本語版が翻訳されていたらと残念に思われるほどの良書である。

ミニヤ・コンカを探ることから登山が始まる。測量や未知の谷への旅などにも、現代では経験できないことが溢れている。例えば、現地での支払いにルピーが使われていたと書かれていることなどは、若い読者にはピンとこないことかもしれない。

庄巻は北西稜登攀の記録である。まず、固定ロー

プが登場しない。「ステップを切る、麻の15メートルのロープ、二人で一つの寝袋に寝る、各自食器一つにスプーン一つとナイフが一つ」などの表現から当時の登山の様子を窺い知ることができる。

4人のメンバーの内2人が登頂したが、ナイフで指を切ったため登頂を断念したエモンズが、下山で凍傷を負いBCからターチュンルー（現在の康定）を経て現在の雅安までたどり着く逸話を挿入されている。

最近出版された札幌山岳会の報告書には、北西稜から見た「ハンプ」の写真が載っているが、本書にも60数年前のほぼ同じ場所からの写真がありその変化の激しさに驚かされる。

また、秋に二度ミニヤ・コンカ登山を行った経験から感じるのは、アタック時によくぞ好天が続いたものだ、ということであるが、それも彼らの研究の賜物であったのかも知れない。彼らは北西稜の七千メートル付近から南西方向に三つの山群を見てその姿まで報告している。訳注にもあるようにこれは正しく我々が1989年に登山した「シャラリ」である。南西約195kmにあるが、「巨大な鶏冠のような形がシャラリ」、「ミニヤ・コンカに似た形がシャノドジ」、「ぎざぎざのくさび形がヤンメイヨン」である。中国の地図ではこの三山を「コンカ雪山」と呼んでいる。

尚、本書の本文が「ミニヤ・コンカ」で統一されているのに、書名やカバーが「ミニヤコンカ」となっているのが解せない。（山森）

A 5判 258頁 カラー6頁 山本健一郎訳

平成10年3月1日刊 2500円＋税

ナカニシヤ出版 ☎ 075-751-1211

能海寛遺稿集

動乱の20世紀がまさに終わろうとする1899年夏、東本願寺の僧「能海寛(ゆたか)」は、チベットの地「康定」に入った。しかし、寛の目的地はチベットではなく「ラサ」であった。チベットの首府ラサに行くためには、渡らなければならない大河があった。「長江」である。長江は場所によって呼び名が変わる。上流から「通天河」、「金沙江」、「揚子江」である。寛は康定を出てその金沙江の

渡船場である「巴塘」に着いた。これを渡ればいよいよ本場のチベットに入りラサに行ける。しかし、この時代はまさにチベットを取り巻く国際情勢が緊迫している頃であった。金沙江を挟んでチベット本土が目と鼻の先にあるのに、どうしても金沙江を渡ることができない。

四川ルートからのラサ入りを断念した寛が向かったのは、青海ルートであったがこれも西寧の先で断念することになった。最後は雲南ルートであったが、1901年4月18日常春の大理から一通の手紙を発信したまま寛は消息を絶ったのである。

本書は大正6年に「能海寛追憶会（寛と巴塘まで一緒にその後青海ルートからラサ入りを果たした寺本婉雅が代表者）」が、寛の入蔵旅行後に書いたものを中心に纏めた遺稿集である。前述した三ルートの詳細な記述は、当時を知る貴重な文献でもあり、寛のラサへの想いが伝わる。

最近寛の話題があちこちで取り上げられるようになったのは、地元で「能海寛研究会」が作られ、積極的な活動を展開しているためである。このような活動によって歴史に埋もれている真実に光があてられることは好ましいことである。HAJでは、1986年秋に西田敏行がレポーターとして寛の足跡を雲南～四川で追ったことがある。TVで放映もされたが、当時は寛を知る人は数少なかったことを思うと隔世の感がある。評者はこれのアレンジを行い、93年には青海ルートの西寧からコンロン山峠に至り、玉珠峰から金沙江の上流である通天河を望み、寛が辿った三つのルートを思い感慨深いものがあった。（山森）

B 5判 272頁 カラーカバー付き

1998年2月28日刊 6000円＋税

五月書房 ☎ 03-3233-4161

東京集会のお知らせ

日時 4月27日(月) 午後7時～

会費千円

場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

1998年中国ヒマラヤ日本隊入山計画

山 名		標 高	ルート	季節	派遣母体名	隊長名	人数	備考
(チベット地区)								
1.	チョモランマ	8,848m	北 稜	春	日本勤労者山岳連盟	近藤 和美	11	未定
2.	〃	〃	〃	春	昭和山岳会	小野寺 斉	13	
3.	〃	〃	〃	春	小西E X P	小西 浩文	1	
4.	シシヤパンマ	8,027m	北東稜	夏	マウンテン・ゴリラ	安村 淳		
5.	ナムナニ	7,694m	北西稜	春	日本山岳会・福岡		4	
6.	カンベンチン	7,281m		春	愛媛大学			
7.	ニンチン・カンサ	7,206m	西 稜	夏	日本ヒマラヤ協会	関根 幸次	10	
8.	メンルンツェ	7,181m	南西面	春	山学同志会	坂下 直枝	4	
9.	ガウリシャンカール	7,146m	北 面	春	〃	〃	4	
10.	ラプチュェ・カンⅢ	7,100m	北 面	秋	京都府山岳連盟	栗飯原一成	9	
11.	ドンライカンリ	6,859m	北 面	秋	同志社大学	吹田 佳晴	7	偵察 未定
12.	カバン	6,717m	東 面	秋	日本ヒマラヤ協会	山森 欣一	3	
13.	無名峰 (6,038m)	6,235m		夏	スピダーニエ同人	坂原 忠清		
(その他地区)								
14.	ガッシャーブルムⅡ	8,035m	東 面	春	立教大学	奥原 幸	5	偵察
15.	ムスターグ・アタ	7,546m	西 稜	夏	栃木県山岳連盟	石澤 好文	31	
16.	〃	〃	〃	夏	リコー山の会	中谷 正秀	6	
17.	〃	〃	〃	夏	東北	小野寺光義	2	
18.	〃	〃	〃	夏	東京	太田 昭彦	7	
19.	ラモ・シェ (四川省)	6,070m	西 面	夏	日本ヒマラヤ協会	酒井 國光	10	未定
20.	無名峰 (四川省)	5,000m		秋		山岡 人志		

1999年H A J 登山隊員募集

未踏峰 (カバン 6,717m)

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。(期間は協議によって変更可)

記

1. 期 間:1999年 9月15日～10月31日(47日間)
2. 募集人員: 6名程度
3. 負 担 金:95万円

チョム・カンリ (7,048m)

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:1999年 7月20日～ 8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:80万円
4. 〆 切 り:定員になり次第

1998年ネパール春季登山隊一覧表

山 名	標高	国 別	隊 長 名	人数	ル ー ト	備 考
アマダブラム	6,812	U.S.A	Mark・D・THOMPSON	7	S.W.R	
アマダブラム	6,812	スウェーデン	Cristian THISTED	6	S.W.R	
アンナプルナIV	7,525	九州労山	吉野 和記	7	N.W.R	
バルンツェ	7,129	イタリア	Paolo GIACHINI	8	S.E.R	
ダウラギリ	8,167	ギリシャ	Sikaris ANTONIS	9	N.E.R	
ダウラギリ	8,167	スペイン	S・S・Arroyo J UAN Jose	6	N.E.R	
ダウラギリ	8,167	スロヴェニア	Anton SKARJA	12	N.W.R	
ジョンサンピーク	7,483	英・ネ合同	Kieran Path'ck O'HARA	8	S.F	S.E.R.経由
ジョンサンピーク	7,483	英・ネ合同	Douglas Kaith SCOTT	7	W.R	
カンチェンジュンガ	8,586	日本山岳会	谷川 太郎	10	N.F	
クンバカルナ	7,710	スロヴェニア	Franco GAJSEK	9	E.F	
クンバカルナ	7,710	米・ロ合同	Lev IOFFE	7	S.W.R	
ランタン・リルン	7,234	好山会	小川 和彦	4	S.E.R	
ローツェ	8,516	スイス	Norbert Joos	7	W.F	
マカルー I	8,463	チェコ	Josef SIMUNEK	8	N.W.R	
マカルー I	8,463	オーストリア	Roland MATTLE	7	S.W.F	
マカルー I	8,463	ブリガリア・ロシア合同	D・Todorov VASSILEV	9	N.W.R	
マカルー I	8,463	ドイツ	Gotz WIEGAND	9	N.W.R	
ブモ・リ	7,161	カナダ	Tim RIPPEL	7	S.R	
ブモ・リ	7,161	U.S.A	Kim REYNOLDS	7	W.R	
サガルマータ	8,848	U.S.A	Robert・H・HOFFMAN	12	S.E.R	
サガルマータ	8,848	U.S.A	Thomas WHITTAKER	5	S.E.R	
サガルマータ	8,848	U.S.A	Randi Todd BURLESON	7	S.E.R	
サガルマータ	8,848	U.S.A	Wallace BERG	5	S.E.R	
サガルマータ	8,848	ノルウェー	Are HERREM	7	S.E.R	
サガルマータ	8,848	シンガポール	Dauld Yew Lee LIM	8	S.E.R	
サガルマータ	8,848	インド	Hariskesh YADAV	7	S.E.R	
タルケ・カン	7,193	オーストリア	Rudlf Alex MAYR	4	S.W.F	

提供・コスモトレック

登山隊員募集！

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に4隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は21日

間を予定しています。

HAJの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:80万円
4. 〆 切 り:定員になり次第

1998年パキスタン登山隊一覧表

山 名	標高	国 別	隊 長 名	人数	期 間	備 考
スパンティーク	7,027	ベルギー	DE Debbler Geert	8	7/20～	④Bと同一隊のため 登山期間は2座で90日
K 2	8,611	アイルランド	Calvin Torrans	8	6/1～	
ナンガ・パルバット	8,125	韓国	KI-Kun-Hong	6	5/20～	
ブロード・ピーク	8,047	アイルランド	Calvin Torrans	8	6/1～	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	イタリア	Manuel Lugli	5	6/14～	
ナンガ・パルバット	8,125	アメリカ	Adrian Burgess	5	6/21～	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	韓国	JI-Hyun-DK	2	6/3～	
K 2	8,611	イタリア	Edmond Joyuesaz	5	5/20～	
ブロード・ピーク	8,047	イタリア	Renato Moro	5	6/15～	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	オランダ	Frans Vermeulen	6	6/25～	
ブロード・ピーク	8,047	スイス	Kari Kobler	5	6/5～	登山期間は2座 で90日
ナンガ・パルバット	8,125	サン&ウインド	大宮 秀樹	5	7/10～	
ガッシャーブルムⅣ	7,925	千葉工大	藤井 正善	5	6/6～	
ガッシャーブルムⅠ	8,068				6/15～	
ブロード・ピーク	8,047	イタリア	Cirera	5	6/20～	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	デンマーク	Henrik Jessen H.C.A	5	6/1～	
ガッシャーブルムⅣ	7,000	同 上	同 上	5	6/1～	
K 2	8,611	イタリア	Hans Kammerlander		6/1～	
ブロード・ピーク	8,047	江北山の会	細田 一郎	1	7/15～	
ディラン	7,257	イギリス	Chris Holder	16	8/1～	
トランゴ・ネームレスタワー	6,245	スペイン	Jose Maria Andres	6	5/25～	登山期間は2座 で90日
スパンティーク	7,027	イタリア	Lisigneli Gulde	5	5/20～	
K 2	8,611	イタリア	Piaizza Oscar	17	6/15～	
トランゴ・タワー	6,258	ブルガリア	Nikolay Petkou	9	6/1～	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	ドイツ	Peter Guggemos	5	6/13～	
ラトックⅠ	7,145	U.S.A	John・G・Bouchard	2	7/15～	
ガッシャーブルムⅣ	7,000	フランス	Urban Jean Neel	3	6/1～	
スパンティーク	7,027	フランス	Philippe Allibert	20	7/28～	
K 2	8,611	スペイン	Luis Miguel Lopez.S	3	6/4～	
ドレフェカル	6,447	イタリア	Angelo Rusconi	10	7/15～	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	U.S.A	Robert・K・Custke・jr	6	6/10～	登山期間は2座 で90日
ガッシャーブルムⅠ	8,068	兵庫岳連	東 秀 訓	5	5/30～	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	シルバータートル	池田 錦重	8	5/20～	
バツラⅠ	7,885	フランス	Escafit Bernard	5	7/15～	
ブロード・ピーク	8,047	ポーランド	Piotr Pustelnik	10	6/24～	
ガッシャーブルムⅠ	8,068	イギリス	Stephen Bell	10	6/7～	
ガッシャーブルムⅡ	8,035	同 上	同上	10	6/7～	

登山期間は8,000m峰で90日、7,000m峰で60日である。

提供：日パトラベル

■ 寸 感 ■

登山団体による「海外情報センター（仮称）」設立の動きが始まった。H A J はヒマラヤの専門団体として、この地域の件に関して要請を受けて協議に加わっている。登山者が不利益を受けないような形での「センター」の一日も早い設立が望まれる。

（山森）

事務局日誌（3月）

- 2日（月） ニンチン・カンサ隊集会（山森ら5名）
- 4日（水） 海外情報センター設立委員会の準備会（於JAC、山森）
フカム・シン氏来日（成田出迎え、中川、宮崎、岩崎）
- 10日（火） ヒマラヤ317号発送
- 11日（水） 事故と環境研究案内状発送
- 14～15日 ラモ・シェ隊合宿（ハケ岳6名）
- 15日（日） フカム・シン氏帰国（成田見送り、山森、寺沢、松山、鈴木正ら8名）
- 16日（月） ポカラ山岳博物館協議（於JAC、

山森）

ニンチン・カンサ隊集会

- 21～22日 ニンチン・カンサ隊合宿（ハケ岳）
- 22日（日） 山田昇十年祭（於沼田、遠藤、山森、寺沢）
- 23日（月） パキスタン建国祝賀会（於、ニューオータニ、寺沢）
- 24日（火） 海外情報センター設立準備会（山森）
- 25日（水） ミニヤ・コンカ出版記念会（山森）
- 30日（月） 東京集会（14名）

ヒマラヤ No.318（5月号）

平成10年4月10日印刷 10年5月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始！

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ（携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg）

●パルスオキシメーター

（血中酸素飽和度測定装置／重量380g／単3乾電池4本使用／携帯型）

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

（隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。）

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遥かなる高みへ



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



**株式
会社**

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外都部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004